日本医学会分科会活動報告

学会名(№143)　一般社団法人 日本臨床免疫学会

代表者名　田中　良哉

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

1. 医学教育
   ① 医学研究の教育のために、研究に有用な各種の公開データセットをまとめた「ヒト免疫研究リソース」を作成し、2020 年より HP にて公開している。
   ② 学会員の生涯教育を目的に「アニュアルエビデンスレビュー教育講演会」を、年 2 回実施している。
   ③ 日本がん免疫学会と共同で「がん免疫療法ガイドライン」第 1 版(2016 年度)、第 2 版(2018 年度)、第 3 版（2023 年度）を刊行した。
   ④ 2021 年より「免疫疾患横断セミナーシリーズ」（オンラインセミナー）を毎年開催。学会員以外の若手、研修医、専門医を対象に、各領域の免疫疾患を横断的に対比し、臨床免疫学の入門教育を実施している。
2. 若手研究者育成
   ① 35 歳以下の選抜された若手学会員を対象に、毎年 Midwinter Seminar を開催：チューターが直接少人数を指導する若手教育の機会を作り、日本研究皮膚科学会や日本リウマチ学会など他学会で開催されているセミナーのモデルともなっている。
   ② 40 歳未満の研究者に対して「研究奨励賞」と「症例報告賞」の 2 種類の学会賞を設定し、若手の研究成果発表を評価。毎年、年次学術集会において選考と表彰を実施している。
3. 認定医制度
   分子標的療法や腫瘍・免疫不全による免疫療法に習熟した認定医の育成のために「免疫療法認定医制度」を実施し、アニュアルエビデンスレビュー教育講演会への参加を義務付けるなど、継続的な教育活動により、診療のレベルアップを図っている。認定医名簿とその所属を学会 HP にて公開。

b.当該領域における国際的な役割

1. 本学会の英文機関誌 Immunological Medicine は Index Medicus に採録され、2023 年 Impact Factor 4.4 を獲得した。
2. 2021 年に米国臨床免疫連合(FOCIS)に加盟以来、毎年同団体の年次学術集会において、当会主催のシンポジウムを開催し、ファカルティを派遣している。なお、2025 年より同年次集会における若手対象のトラベルグラントを募集することが理事会にて決定している。
3. 2022 年より国際臨床免疫シンポジウムを毎年定期開催し、海外への日本の臨床免疫学の発信、また世界的な最先端情報の収集に努めている。また、Young Investigator's Award を設定し、若手がグローバルに活躍できるよう支援している。

ｃ.活動からもたらされる社会的な意義
近年、臨床免疫学の発展は著しく、自己免疫疾患、アレルギー、移植などに対する分子標的療法、免疫不全症や悪性腫瘍に対する免疫療法薬が開発されてきた。生活習慣病、外傷、老化、妊娠など多くの疾患の病態への免疫の深い関与の解明は、横断的な臨床免疫研究の重要性を明らかにした。マルチオミックス解析や単一免疫細胞遺伝子解析などの各種新技術を駆使した研究により、臨床免疫学の更なる社会貢献が期待される。 特に、本学会特有の疾患として成人免疫不全症約 6000 例、免疫チェックポイント阻害薬などの免疫関連有害事象（irAE）患者数万人などを対象とし、分野横断的な本学会は異なった背景を有する研究者が多様な免疫疾患の治療応用や疾患克服を目指す独自な位置付けにある。例えば、厚労省原発性免疫不全症研究班では、小児科医に加え本学会を構成する膠原病科、消化器科、皮膚科が参加し、ガイドラインや診療体制の構築に貢献している。最も注目される分子標的療法や抗腫瘍免疫療法等に習熟した免疫療法認定医の育成制度を充実させている。
ｄ.学会運営上留意している点
日本臨床免疫学会は「臓器・疾患・分野横断的」な臨床医を中心に構成され、膠原病、がん、消化器、皮膚・粘膜、神経免疫疾患、アレルギー、免疫不全など、学際的、横断的免疫学から疾患の克服を目指している。 役員の構成、年次学術集会のプログラムなど、「横断的」であることを基本としている。
Ⅱ.日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載して下さい.
1.　年次学術集会における合同企画 「日本消化器免疫学会」「日本生殖免疫学会」「日本小児リウマチ学会」などと、合同開催または合同企画を実施して、臓器や領域を横断し、あらゆる角度から免疫疾患にアプローチする機会を増やしている。 2.　日本免疫学会との合同セミナーを企画中